

令和元年6月19日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03472

研究課題名(和文) アイヌ漆器に関する学際的研究

研究課題名(英文) An Interdisciplinary Study on AINUSHIKKI (Lacquerware)

研究代表者

浅倉 有子 (ASAKURA, Yuko)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：70167881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,200,000円

研究成果の概要(和文)：明治初年においては、各場所におけるアイヌ人口の多寡の差が、移入漆器の種類と量を規定し、「自分稼」との運動が見られることと、サハリン州郷土史博物館所蔵漆器のコレクション形成史の一端を明らかにした。同館所蔵の未紹介の色丹関係文書と全ての所蔵漆器を調査した。同館から塗膜片の提供を受けて科学分析を行い、研究成果を発表した。漆器の産地別の種類や技法等の特徴、年代等についての傾向を明らかにし、現有漆器が、明治・大正期など比較的新しいものを中心とすることが判明した。漆器を通してみると、道内のアイヌは、旧土人保護法が制定された1898年以降においても、文化的な力量を喪失していなかったことを想定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

道内の各場所におけるアイヌ人口の多寡の差によって、移入される漆器の種類と量に大きな相違があり、アイヌの「自分稼」の状況と漆器の所有との運動がみられることが判明した。また、道内博物館等が所蔵する漆器の調査と科学分析の結果、アイヌ向けの漆器の産地別の種類や技法等の特徴、製作時期などが判明した。漆器を通してみると、少なくとも道内のアイヌ民族は、旧土人保護法が制定された1898年以降においても、文化的な力量を喪失していなかったことを想定した。サハリン州郷土史博物館所蔵の未検討の色丹関係文書とサハリンアイヌが用いた漆器の調査と科学分析を実施し、サハリンアイヌが日本産の漆器を利用していることが判明した。

研究成果の概要(英文)：First of all, this study showed that the difference of the population of the Ainu who were forced to work in the early years of Meiji determined the kinds and quantity of transfer Shikki (lacquerware), which were connected with Jibun Kasegi, meaning the Ainu's willingness to work for their own profit. Secondly, the study examined the documents concerning Shikotan and all Shikki owned by the Sakhalin Reginal Museum. Additionally, coating pieces provided by the Museum were scientifically analyzed, the results of which were reported at academic conferences. Thirdly, the study clarified the kinds and characteristics of techniques of Shikki based on production areas as well as the tendencies of Shikki by production age. Looking at Shikki, the Ainu in Hokkaido were found not to lose their cultural power after 1898 when a Japanese law named Protection Law of Hokkaido Aborigines was enacted.

研究分野：日本近世史

キーワード：アイヌ 漆器 場所請負商人 郷土博物館 サハリン 塗膜分析 科学分析

1. 研究開始当初の背景

アイヌ民族が漆器を宝器・祭器として珍重したことにより、中世(出土漆器を含む)～近代の漆器が北海道内に多数現存する。漆器は、文献史学を研究の核としつつも、考古学、民俗(族)学にあわせ、塗膜分析等の科学的手法の活用、さらに実際の漆器制作者を含めた共同研究が不可欠な領域である。本研究では、平成 25-27 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「アイヌ漆器に関する歴史学的研究-文献史学と考古学、民俗(族)学・文化人類学の連携-」の成果を踏まえたものである。基盤研究(C)では、2015 年 10 月に北海道大学でシンポジウムを開催し、一般の方を含めた聴衆に研究成果を広く公開した。また、今科研につながる塗膜分析などの科学分析、サハリンの大福帳の分析などの研究成果を蓄積した。

2. 研究の目的

本研究は、アイヌ民族が用いた中世末から近代までの漆器を対象に、漆器の生産地と技法等の特徴(木地、下地、顔料、加飾等)を明らかにし、アイヌの人々に、いつ、どこで生産された、どのような漆器が、如何なるルート・方法でもたらされたのかを、サハリンや千島を含めて解明することである。漆器を論じることは、中世～近代の和人社会の技術、経済、流通構造について論じることでもある。言い換えると、本研究の目的は、アイヌが用いた漆器の具体像を明示すること、列島の北から漆器文化を明らかにすること、精神文化を含めたアイヌと漆器の具体的な関わりを明らかにすることである。

3. 研究の方法

漆器研究は、文献史学を核としつつも、考古学、民俗(族)学にあわせ、塗膜分析等の科学的手法の活用、さらに実際の漆器制作者を含めた技法の検討など、共同研究が不可欠な領域である。本科研では、学際研究として、1 文献班、2 考古学・民具班、3 科学分析班、4 技法班の 4 班で研究を行なったが、協議と情報の共有が不可欠であるので、可能な限り共同で調査・研究を行なった。上記 4 班による調査・分析に併せ、共同調査として、千島を含む文書史料を所蔵しているロシア・ユジノサハリンスクのサハリン州庁文書館における史料調査と、サハリン州郷土博物館所蔵の歴史史料とサハリンアイヌが用いた漆器の調査に着手する。国境付近の場所においては、より手厚いアイヌ撫育が行われている可能性が高く、漆器も高度な技法の漆器が手渡されている可能性があるためである。各年度末には研究会を開催し、相互に成果を報告し議論することで、到達点と成果の共有を図っていく。最終年度には、3 年間の成果をシンポジウムという形で一般に公開し、かつ成果の刊行を目指す。

4. 研究成果

(1) 古文書調査と分析の成果

明治初年の開拓使文書等の分析から、西蝦夷地と東蝦夷地の各場所におけるアイヌ人口の多寡の差によって、移入される漆器の種類と量に大きな相違があったこと、またこれはアイヌの「自分稼」の状況との連動がみられることが明らかにされた。また、サハリンアイヌに関する研究では、大野藩が幕末に設定した漁場ウシヨ口場所を対象に、道内に比して高額な漆器が役付のアイヌとその家族に渡されていることが指摘され、有力者の「家」の財力、役の世襲にとって漆器が重要な意味を持っていたことが論証された。他方、郷土博物館所蔵漆器のコレクション形成史と、コレクションが収集されたライチシカの歴史像が検討された。

(2) 道内博物館等が所蔵する漆器の調査と科学分析

小樽市総合博物館・新ひだか町博物館・千歳市埋蔵文化財センター・幕別町蝦夷文化考古館における現有漆器の調査と一部塗膜片の分析を行なった。その結果、研究分担者の H 氏の分析で、小樽市総合博物館所蔵漆器の中に海外の漆、すなわちベトナム産の漆を用いた漆器が存在することが判明した。また、研究協力者の Y 氏と研究分担者の M 氏の調査と塗膜分析によって、アイヌ向けの漆器について、輪島・会津・浄法寺(現岩手県二戸市周辺)・京都など、産地別の種類や技法等の特徴、年代等について判明しつつある。また現有漆器は、明治・大正期など比較的新しいものを中心とすることが判明した。以上の検討から、漆器を通してみると、少なくとも道内のアイヌ民族は、旧土人保護法が制定された 1898 年以降においても、文化的な力量を喪失していなかったことが想定される。

(3) 東京国立博物館所蔵のアイヌが用いた漆器の調査

千家十職の中村宗哲が作成した「台盃」等の調査・撮影を行なった。宗哲の「台盃」は、明治 5 年以前に作成されたもので、年代が明確になる数少ない漆器である。

(4) サハリン州庁文書館における史料調査、サハリン州郷土博物館所蔵の歴史史料とサハリン

アイヌが用いた漆器の調査と科学分析

サハリン州庁文書館では、サハリンアイヌ関係と想定されるすべての文書のデジタルデータを入手した。またサハリン州郷土博物館所蔵の未紹介の色丹関係文書の撮影を完了し、所蔵漆器の全ての調査を実施した。その過程で、基盤研究(C)で翻訳したロシア語文献が漆器調査に有用であることを確認した。さらに、同館から漆器の塗膜片6点の提供を受け、M氏が科学分析を行い、その研究成果を同館で発表を行った。同館での研究報告会は、平成28年度から30年度まで3年間、毎年実施した。30年度には、考古学部長のシュビナ氏から、日本人が渡航できない北千島の調査で入手した塗膜片の提供を受けた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計38件)

- 1 室瀬和美、北海道から発信する漆—今につながる漆文化—、アイヌの漆器に関する学際的研究、2019、7-29、査読無し
- 2 本多貴之、小樽市総合博物館所蔵漆器の科学分析、アイヌの漆器に関する学際的研究、2019、149-162、査読無し
- 3 神谷嘉美、小樽市総合博物館所蔵の漆器に用いられた金属の形態と加飾技法、アイヌの漆器に関する学際的研究、2019、163-171、査読無し
- 4 松本あづさ、明治初年におけるアイヌ向け漆器の仕入れについて、アイヌの漆器に関する学際的研究、2019、129-147、査読無し
- 5 東俊佑、北海道ウシヨ口場所における漆器の流入とアイヌの給料勘定、アイヌの漆器に関する学際的研究、2019、35-55、査読無し
- 6 宮腰哲雄他、サハリンアイヌの漆器の特徴と科学分析、アイヌの漆器に関する学際的研究、2019、73-89、査読無し
- 7 谷本晃久、近世・近代のサハリン南部の歴史と漆器～西海岸ライチシカ:来知志を中心に～、アイヌの漆器に関する学際的研究、2019、57-71、査読無し
- 8 浅倉有子、南部箔椀に関する基礎的研究、アイヌの漆器に関する学際的研究、2019、195-212、査読無し
- 9 菅原慶郎、蝦夷地で流通する「塗物類」に関する一考察、アイヌの漆器に関する学際的研究、2019、113-128、査読無し
- 10 藪中剛司、岩手県二戸市浄法寺で生産された可能性のある漆器について—新ひだか町博物館所蔵資料の検討から—、アイヌの漆器に関する学際的研究、2019、237-253、査読無し
- 11 Tetsuo Miyakoshi, Takayuki Honda 他, Analysis of Sakhalin-Ainu lacquerwares by pyrolysis gas chromatography/mass spectrometry, Journal of Archaeological Science: Reports, 20:1-5, August 2018, DOI: 10.1016/j.jasrep. 2018. 04.012 査読あり
- 12 Shinichi Takahashi, Meesook Sung, Takayuki Honda, Rong Lu, Jaekook Jung, Tetsuo Miyakoshi, Analysis of Japanese Jōmon period red lacquerwares by pyrolysis gas chromatography/mass spectrometry, Journal of Archaeological Science: Reports18, pp.85-89(2018) 査読あり
- 13 Okamoto Shun; Honda Takayuki; Miyakoshi Tetsuo; Han Bin; Michel Sablier, Application of pyrolysis-comprehensive gas chromatography/mass spectrometry for identification of Asian lacquers, Talanta1, 89, pp.315-323(2018) 査読あり

- 14 松本あづさ、 “境界領域” 蝦夷地の眺め方、歴史評論、813、2017、60-68、査読あり
- 15 谷本晃久、北の「異国境」 幕府外交の転換とアイヌ史上の画期、日本近世史研究と歴史教育、2017、100-141、査読無し
- 16 佐々木利和・谷本晃久、『夷酋列像』の再検討へ向けて:シモチ像と「叡覧」と、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要、2、2017、1-20、査読あり
- 17 藪中剛司他、ニンカリの物質文化的研究、アイヌ関連総合研究等助成事業報告書、17、1-40、2017年、査読有り
- 18 Meesook Sung, Jaekook Jung, Rong Lu, Tetsuo Miyakoshi, Study on Chinese Historical Lacquer Culture and Technology - Analysis of Chinese Qin-Han Dynasty Lacquerware, Journal of Culture and Heritage, Elsevier, 21, 2016, 889-893, 査読あり

〔学会発表〕(計 41 件)

- 1 Yury ALIN、サハリン州郷土博物館の概要、シンポジウム「アイヌの漆器に関する学際的研究」(招待講演)(国際学会)、2018年12月9日
- 2 Irina Kim、サハリン州郷土博物館所蔵の漆器について、シンポジウム「アイヌの漆器に関する学際的研究」(招待講演)(国際学会)、2018年12月9日
- 3 佐々木利和、アイヌ絵の中の漆器、シンポジウム「アイヌの漆器に関する学際的研究」(国際学会)、2018年12月9日
- 4 松本あづさ、明治初年におけるアイヌ向け漆器の仕入れについて、シンポジウム「アイヌの漆器に関する学際的研究」(国際学会)、2018年12月9日
- 5 清水香、擦文・アイヌ文化における漆椀の実年代—総合的な分析による交流史の復元、シンポジウム「アイヌの漆器に関する学際的研究」(国際学会)、2018年12月9日
- 6 Tetsuo Miyakoshi, Takayuki Honda 他, Investigation and analysis of lacquerwares of Sakharin-Ainu by pyrolysis-GC/MS and cross-section analysis, サハリン州郷土博物館, 2017, 9, 25
- 7 谷本晃久、サハリンで記された最古の文書と漆器、サハリン州郷土博物館、2017年9月25日
- 8 浅倉有子、「アイヌ漆器に関する学際的研究」の趣旨、サハリン州郷土博物館、2017年9月25日
- 9 宮腰哲雄、文化財としての漆器の科学分析、日本漆アカデミー第1回講演会(招待講演)、明治大学グローバルフロント、2016年05月29日
- 10 谷本晃久、近世千島列島史の構築へむけての課題と展望、AAS 米国アジア学会 2016年次研究大会(招待講演)(国際学会)、ワシントン州立コンベンションセンター、2016年04月02日

〔図書〕(計 4 件)

- 1 浅倉有子編、アイヌの漆器に関する学際的研究、北海道出版企画センター、全 272 頁、2019年
- 2 宮腰哲雄、室瀬和美他、漆(1)、地域資源を活かす生活工芸双書、農山漁村文化協会、全 150 頁、2018年

3 佐々木利和・谷本晃久、国立公文書館所蔵 昌平坂学問所旧蔵「蝦夷語集」元・亨 影印・翻刻、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、全 200 頁、2017 年

4 谷本晃久・松本あづさ、北海道史事典、北海道出版企画センター、全 548 頁、2016 年

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：宮腰哲雄

ローマ字氏名：Tetsuo MIYAKOSHI

所属研究機関名：明治大学

部局名：研究・知財戦略機構

職名：研究推進員

研究者番号（8 桁）：00062018

研究分担者氏名：谷本晃久

ローマ字氏名：Akihisa TANIMOTO

所属研究機関名：北海道大学

部局名：文学研究科

職名：教授

研究者番号（8 桁）：20306525

研究分担者氏名：本多貴之

ローマ字氏名：Takayuki HONDA

所属研究機関名：明治大学

部局名：理工学部

職名：専任准教授

研究者番号（8 桁）：40409462

研究分担者氏名：松本あづさ

ローマ字氏名：Azusa MATUMOTO

所属研究機関名：藤女子大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：90510107

研究分担者氏名：藪中剛司

ローマ字氏名：Takeshi YABUNAKA

所属研究機関名：独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館

部局名：学芸企画部

職名：主任研究員

研究者番号（8 桁）：50723003

研究分担者氏名：佐々木利和

ローマ字氏名：Toshikazu SASAKI

所属研究機関名：北海道大学

部局名：アイヌ・先住民研究センター

職名：客員教授

研究者番号（8 桁）：80132702

(2)研究協力者

研究協力者氏名：四柳 嘉章

ローマ字氏名：Yoshiakira YOTSUYANAGI

研究協力者氏名：東 俊佑

ローマ字氏名：Shunsuke AZUMA

研究協力者氏名：菅原 義郎

ローマ字氏名：Yoshiro SUGAWARA

研究協力者氏名：清水 香

ローマ字氏名：Kaori SHIMIZU

研究協力者氏名：神谷 嘉美

ローマ字氏名：Yoshimi KAMIYA

研究協力者氏名：小林 幸雄

ローマ字氏名：Yukio KOBAYASHI

研究協力者氏名：室瀬 和美

ローマ字氏名：Kazumi MUROSE

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。